

おわりに

「留学生一〇万人計画」

一九八四年、私は中曽根首相時代の「留学生一〇万人計画」により、日本語と日本の文化を学ぶために留学生として来日しました。当時バングラデシユはエルシャド軍事政権下で、不安定な社会情勢のなか、大学を出た者の多くは外国に留学や出稼ぎに行きました。私はチッタゴン大学修士課程で歴史を学んでいましたが、歴史学部の教授と授業内容をめぐって口論となり、そのまま中途退学しました。その後、多くのバングラデシユ人がそうするように、アメリカに留学することになりましたが、どうも気が進みませんでした。

そんなとき、仏教の国である日本が留学生を受け入れていることを知り、私はぜひ日本に行きたいと思い、今は亡き父の反対を押し切って、日本に留学することになりました。アメリカに留学することを希望していた父でしたが、日本に行ったら、パル判事のことを調べてみなさいと言って、こころよく送り出してくれました。

## 我妻和男先生との出会い

来日して私は日本語学校に入学しましたが、すぐに日本が好きになりました。人々は礼儀正しく親切で、どこに行っても国が清潔に保たれています。祖国バングラデシュとあまりにも違うこの日本に対して、驚きと尊敬の念をもつようになりました。

日本での生活が安定してきた一九八七年、バングラデシュ大使館での催し物があったとき、当時筑波大学の教授であった我妻和男先生にはじめてお会いしました。我妻先生と夫人の綱子先生とともにタゴール研究家で、夫妻はいつも私を自宅に招いて、タゴールと日本人の文化面の交流について教えてくださいました。タゴールが何度も来日したことさえ知らなかった私は、タゴールと日本人の交流の歴史に夢中になりました。

日本人とベンガル人の交流について、ベンガル人社会では、一部の知識人には知られていましたが、一般的にはそうした歴史はあまり知られていませんでした。私はチッタゴン大学の学生時代から、雑誌や新聞に記事を投稿していたので、この感動をベンガル人に伝えたいと思いました。

また、来日直後より、私は日本の新聞や書店に並ぶ雑誌の美しさに目を奪われ、印刷・

出版技術を学びたいと思っていました。日本人の紹介もあり、いくつかの印刷会社に就職して、シルク印刷、オフセット印刷、刷版、校正の技術を、また独学でDTPを学びました。

一九八〇年代後半は、バングラデシュからの外国人出稼ぎ労働者も増えましたが、祖国を離れて楽しむも少なく、情報をまったく得られない日本の環境で生活する彼らのために、それまでの経験を生かして雑誌を発行したいと考え、一九九一年、ベンガル語情報誌『マンチットロ』を発行しました。最初は資金繰りが大変でしたが、ソフトバンクの前身であるITJ（日本国際通信株式会社）から広告をもらえるようになり、月刊で定期的に発行することができるようになりました。最後の何年間かは季刊誌としてではありましたが、『マンチットロ』は二〇〇二年まで続けることができました。

## 田中正明氏との出会い

一九九八年から二〇〇二年の中頃まで、私は印刷会社で働いていました。会社の本棚にはたくさんの本があって、一九九九年頃のことだと思えますが、ある時、本を見ていると、その中に田中正明氏の書いた『パール博士の日本無罪論』という本があるのを見つけまし

た。ページをめくるうち、それは日本に来るときに父が語っていた、バル判事に関する本だということがわかり、私は社長に許可をもらってその本を借りてきました。

日本語だったので、当時はまだ内容をよく理解できませんでしたが、わかる限りその本を読んで、社長に本を返しに行くと、「田中正明さんに会いたいですか」と聞かれました。私は「会いたいですね」と答えると、巻末の著者紹介に電話番号が書いてあるから、電話をかけてみなさいと教えてくれました。今であれば考えられないことですが、古い本だったので、そこには田中正明氏の住所と電話番号が書いてありました。まさか田中氏と話せるとは思いませんでしたが、少しだけ期待して、私はその電話番号に電話をかけてみました。すると、ご本人が電話に出て、ぜひ遊びに来なさいと言ってくれました。

田中氏はムジブル・ラーマンの後、出会ったベンガル人はあなただけだと言って、私の訪問を喜んでくれました。また、田中氏はムジブル・ラーマンが好きで、寝室の枕元にムジブルの写真が飾ってあると言って、実際に寝室まで私を連れていき、その写真を見せてくれました。そこには一九七二年に田中氏がバン格拉デシュを訪れ、ムジブル・ラーマンに日本招請を伝えた際、ムジブルと握手をしている写真がありました。

私は貴重な写真に感動し、コピーしたので、写真をお借りしたいとお願いすると、氏はこちらよく承諾してくれて、写真の額を外しました。すると同じ写真がもう一枚出てきて、「あなたはラッキーだね」と言って、その写真を一枚くださいました。

さらに田中氏は、「あなたはこれから、南京事件のことを研究した方がいいですよ」と言って、氏の著書である『南京事件の総括―虐殺否定の十五の論拠―』に自分のサインをして、その本を私にくださいました。

そのとき、私は田中氏からバル判事や下中弥三郎氏などの話をたくさん伺いました。当時私は下中弥三郎氏を知りませんでしたが、自分の働いている会社が平凡社の系列会社であることは知っていました。田中氏に下中弥三郎氏が平凡社の創立者であることを教えられ、自分が平凡社の系列会社で働いていることに、不思議な縁があるものだと感じしました。父が、私を田中氏のもとに導いてくれたような気がしました。

### 日本の功績を祖国に知らせたい

田中氏との出会いから、バル判事や東京裁判のことを調べるようになり、友人のロフイ

クル・アロム氏を通じて、東條英機元首相の孫娘である東條由布子さんと知り合いました。東條さんは東京裁判やパル判事、東條元首相、ビハリ・ボースやスバス・チャンドラ・ボースのこと、そして靖国神社のことを私に詳しく教えてくれました。

日本に来る前、私はビハリ・ボースのことを知りませんでした。また、スバス・チャンドラ・ボースのことは知っていましたが、東條英機元首相や日本との関係などはまったく知りませんでした。こうした歴史を調べているうちに、インドをはじめとするアジア独立の道を開いてくれたのは日本であったこと、そしてそのために大変な犠牲を払ったことを知って、私は驚愕しました。こうして私は、インドの独立に日本が多大な貢献をしたことを、バンングラデシユやインドの歴史教科書に載せるべきだし、国家として日本に感謝するべきだと思ふようになりました。

私はバンングラデシユやインドの人々にこのことを知らせたいと思い、『知ってる、知らない日本』シリーズ全三巻（ベンガル語…うち一巻のみヒンディー語にも翻訳された）のなかで、日本の文化、歴史、そして日本人とベンガル人の交流などを紹介してきました。

このたびベンガル人と日本人の交流の歴史を、日本語で紹介する機会を与えていただき

たことは大変名誉なことです。戦争を知らない世代の日本人々に、アジア人、そしてベンガル人として感謝の気持ちを伝えるとともに、これからもこの歴史を研究し、人々に伝える活動をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、私をここまで導いてくださった今は亡き四名の方、我妻和男先生、綱子先生、田中正明氏、東條由布子さんに感謝を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

また、本書を完成するにあたって、大変お世話になりましたペマ・ギャルポ先生、三浦小太郎氏、ハート出版編集部の西山世司彦氏に深くお礼を申し上げます。

私は来日してからの三六年間、数多くの日本人やベンガル人にお世話になりました。そのすべての方に心からの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。昨年、還暦を迎えましたが、今の私があるのは、皆さんのご支援があつてこそだということを、いつも心のなかに感じていきます。

プロビール・ピカシユ・シャーカー